


朝日新聞

(能登半島地震 あのととき医師は) 小児科医、子どもたちとともに：3 再開した「10代の居場所」

有料記事

2024年4月24日 5時00分



わじまティーンラボに立つ小浦詩さん＝石川県輪島市 

石川県輪島市の「ごちゃまるクリニック」の小児科医、小浦詩さん（42）は、地震後、改めて地域に出て活動することの重要性を感じていた。

集団避難した中学生たちが身を寄せる白山市も訪れた。子どもたちは思った以上に元気でほっとした。

「いつもやっていることを6割くらいで」「自分の気持ちの揺れや何げない今を日記におさめておくといい」。様々な人たちからもらい、自らも助けられたアドバイスを、非常事態に忙しく対応する学校の先生たちに伝えた。

ごちゃまるクリニックは1階部分がまだ使える状況になく、駐車場に建てたコンテナでの診療が続いている。

3月の終わり、クリニックの2階と3階に設けている10代の居場所「わじまティーンラボ」がようやく再開した。地震の前のように、小学校高学年～高校生の子供たちが集まり、漫画を読んだり、自習室で勉強したり、異年齢で交流したりしている。

市外の避難先から戻ってきた子どももいるが、地震の前に比べればまだまだ少ない。通学路はがれきなどで危険が多い。体育館は避難所のまま、校庭では仮設住宅の建設が進む学校もあり、子どもたちが体を動かす機会が減った。2月半ばに輪島に戻った自らの3人の子供たちとの生活の中でも、環境の激変を肌身で感じる。

様々な心配事はあるが、子どもたちからは、この状況を乗り越えようとするたくましさも感じている。少なかった子どもが地震後にさらに減り、地元に残った子が「かわいそう」とならないよう、力を尽くしたいと考えている。

ごちゃまるクリニックという名前には、赤ちゃんから高齢者まで、多職種がつながって「ごちゃませ」に、病気だけでなく人生や家族も「まるごと」支えたいという思いが込められている。

「今までのような小児科医としての仕事は減っているけれど、地域の健康のためにやることはたくさんある。みんなが戻ってきたいと思える輪島にしていきたい」（松本千聖）

■ご意見・体験は、氏名と連絡先を明記のうえ、 iryoy-k@asahi.com へお寄せください。

朝日新聞のデジタル版に掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.